

## 検査マニュアル廃止で融資姿勢は変わったか？

多胡秀人

(2022/07/1)

6月は二度ほど大勢の人たちの前で話をしました。

13日の近畿財務局主催の水野教授のゼミ、

<https://tabiblog.net/2022/06/post-12671/>

20日の諏訪シンポジウム2022「諏訪から地域の未来を考える」です。

<https://tabiblog.net/2022/06/post-12726/>

両方で強調したのは、

「新型コロナウイルスの襲来が、金融検査マニュアルの廃止後で本当に良かった」

ということです。

ポイントを絞り込むと、

マニュアルの呪縛があっては、業況の芳しくない中小企業のところにポストコロナに向けた事業変革のための資金がスムーズかつ弾力的に届かず、再チャレンジの芽を潰してしまう可能性が高いからで

す。ゼロゼロ資金などのコロナ対応保証つき融資が手厚く準備されているものの、これらですべてが賄えるわけではありませんから。

さて、

1990年代にバブル崩壊による不良債権が金融機関の屋台骨を揺るがしたことを受け、マニュアルが導入されたのが二十数年前です。このマニュアルは金融機関の健全性に主眼が置かれていて、不良債権処理には威力を発揮したものの、借り手である事業者が苦境に陥り、格付けが低下すると、画一的に再チャレンジのための資金が出なくなるという重大な問題を内包していました。金融機関が抱える膨大な不良債権の撲滅を最優先する時代の産物はなぜか約20年続き、2019年12月に至り廃止となりました。

ワタシはマニュアル廃止とその後の対応に関する金融庁における研究会、審議会に参加しましたが、議論の席上、以下を常に頭の中に置いていました。

「厳しい経営環境に追い込まれている企業であっても、事業の中に光るものがあり、企業経営者が誠実で、やる気に満ちあふれていれば、再チャレンジ資金は速やかに実行されるべきである」

森俊彦さん(日本金融人材育成協会会長)が以前から強く主張しておられるポイントで、その思いは筆者も共有しています。

この点は融資ディスカッションペーパー(融資DP)にしっかりと書き込まれています。

<https://tabiblog.net/2019/12/post-4005/>

金融機関や中小企業支援組織で経営改善・事業再生に関わる人たちが集まってネットワークづくりをスタートさせようと、島根県信用保証協会の小野拳さんと話をし始めたのも、融資 DP が最終ステージに差し掛かったときでした。

それが 2020 年 1 月 18 日の松江市での企業再生人シンポジウムとして結実し、

<https://tabiblog.net/2020/01/post-4218/>

奇しくも翌 2 月に新型コロナウイルスの本格的襲来。

なんとか間に合いました。

しかるに、

コロナ禍という未曾有の局面において、マニュアル廃止となっても、従来からの融資姿勢を変えようとしない地域金融機関が多数派であり、監査法人もこの流れについてこれていません。

金融検査マニュアル時代の復活を、といった声もどこかから聞こえてきます。先祖返り、冗談じゃない。

金融検査マニュアルが廃止となった意味を、胸に手を当てて考える必要がありそうです。

<https://tabiblog.net/2019/04/post-e30922/>

(了)

※※※本稿の無断転載、お断りします※※※